

ニュースレター *News Letter*

No.23

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

巻 頭 言

キリスト教と文化研究所所長 村 椿 真 理



本年も早や主の降誕を祝う季節となりました。本日はここにニュースレター第23号をお届け致します。本号は、最近行なわれた坂田祐研究プ

ロジェクトによる「公開講演会」から、二つの活動報告を載せています。

本学は本年10月、学院創立125周年の記念式典を感謝のうちに挙行了しましたが、本研究からも共同研究プロジェクトによる多くの企画が提出され、ここに報告された坂田研「公開講演会」なども、その特筆すべき活動の一つでした。本研究所からはこの期に「学術・講演行事専門部会」協賛による「本学教育理念を巡る公開シンポジウム」の開催、また『バプテスの伝道と社会的貢献』（記念論文集）刊行といった、本学の伝統に即した活動や研究成果の発信などが行なわれましたが、どれも、極めて意義あるものとなりました。

明治7年頃から20年代にかけて、日本には多くのキリスト教主義学校が設立されて今日に至りました。本学院はルーツを辿ると、明治17年の「横浜バプテスト神学校」に遡るわけですが、本学の「建学の精神」は「キリスト教による教育を行なう」との内容であり、他のキリスト教主義学校と（文言に若干の相違があっても）基本的には変わるものではありませんでした。ただ興味深いことは、そこに教派的伝統に関する言及はほとんど見られなかったということでした。しかしそこには、当時の私学間における「教派主義の競合を避けよう

とする意図」が、明確に働いていたことが推測されるのです。わが校は何々派だ、わが校は何々派だと、教派色を余り表に出し過ぎると、キリスト教に対する周囲の誤解を招き、好印象を与えないのではとの懸念があったことも推測されます。また学校によって異なりますが、歴史の中で、教派母体のコントロール下から学校として独立した経緯も注目されるわけです。

本学の場合もその点は同様であり、そのルーツは一貫して明確にされてきたのですが、バプテスト固有の主義（principle）を持ちつつも、それらにはあえて表に出さない形を採ったといえるかも知れません。つまりどの学校においても「キリスト教主義」という公の看板を掲げながら、その個性に関しては、自らの伝統に根差した学校形成が実は行なわれてきたように思われるのです。

今日のグローバルな時代において、単なる教派主義は言うまでもなく時代錯誤以外の何ものでもありません。しかし同じキリスト教による教育を志す諸大学が、それぞれの伝統の個性を生かしつつ、今こそ力を合わせ、現代世界に資する教育・研究使命を担うことが求められているのではないでしょうか。この夏、本研究所は施設を一新致しましたが、今後とも、本学ならではの社会に貢献し得る特色ある活動を模索し、より開かれた研究体制を構築して参りたいと願っております。

学部横断型研究所としては、それは必ずしも容易なことではありませんが、皆さまのお知恵とお力をいただきつつ、さらなる発展を目指して参りたいと存じます。この季節に、すべての皆さまの上に、主の限りない祝福が豊かにありますように、祈念しております。

「坂田プロジェクト」研究会報告

今年度、関東学院創立 125 周年を迎えるにあたって、坂田研究プロジェクトは、校訓および建学の精神を検証するために坂田祐に関する一連の公開研究会を開催した。

プロジェクト代表 帆苅 猛

第 1 回 テーマ『関東学院の教育と坂田祐—校訓を中心として—』

講 師 大島良雄先生 (元文学部長、大学宗教主任)

大島先生は坂田の校訓についての説明を中心に講演して下さった。大島先生はまず、坂田の著作『恩寵の生涯』について、これは確かに人を感動させる本だが、ただ、それが、いつ、どこで、どのような状況で、誰に向かって話されたか、話された状況を踏まえて理解することが大切であることを語られた。そして、坂田がいつ、どのような状況で話したかを踏まえつつ、坂田の「人になれ 奉仕せよ」との校訓について、坂田自身の話を中心に解説して下さった。



坂田は、1919 年に創設した中学関東学院の入学式で「人になれ 奉仕せよ」と力説した。坂田によると、これは「上から示された言葉」であった。

その後、1924 年の第一回の卒業式でもこの言葉を繰り返し、そして、「人になれということと奉仕せよということは相離すべからざることである。吾人の徳は、奉仕によって磨かれるのである」と説明した。加えて、坂田は「自分等教員は範を諸子の前に垂れなければならないのであるが、不完全極まる貧弱さを以っては到底出来ないことであった」という。それではそれはどうして実現できるか、と言うと、坂田は、それは祈りなくしては出来ないことであり、「祈りなくして、諸子の前に立つ事は出来なかった」と語る。そして、坂田は奉仕の具体例として、武力によって貢献することよりも「人道のチャンピオン」になるようにと勧める。

戦後になって、1963 年の創立記念日で、坂田は「人になれ」ということは、「神の御ひとり子、完全無欠なるイエス・キリストを模範として」人になることだ、と説明している。そして、関東学院は「このイエス・キリストなる土台の上に建っているのです」と語る。

大島先生が坂田について、「坂田は軍人であると同時に、そこを突き抜け、内村鑑三の弟子であったと同時に、そこを突き抜けていた」と語られたことが大変印象に残った。

最後に大島先生は、坂田が定めた本学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」についてのさまざまな解釈について触れられた。大島先生は、坂田が「この校訓は祈って上から示された、すなわち、啓示によった」と語っているのは非常に意味深いことのように思える、と言われる。すなわち、これは私たちそれぞれの信仰と考え方に応じて解釈し、理解することが出来るのだ、という。したがって、これを聞くもの一人ひとりが考えて、自分の信仰と学問によって理解することができる、そうして、校訓についての理解を深めることができるのではないかと、それが大切なのではないかと、私も後輩に勧めて下さった。

第 2 回 テーマ『関東学院の教育と坂田祐—坂田祐の教育理念と白雨会—』

講 師 鈴木範久先生 (立教大学名誉教授)

坂田は青年時代に内村を紹介され、内村の書物を読み始めてからは終生、内村を師として仰ぎ師事している。とくに内村の弟子グループである「白雨会」を結成し、その幹事に就任してからはなおさら内村への傾倒を深める。

鈴木先生は、まず、内村鑑三の弟子たちのグループである柏会と白雨会について説明して下さった。そして、柏会と白雨会のそれぞれの特徴についても話された。柏会がどちらかというと一高・帝大のエリート集団であるのに対して、白雨会は必ずしもそうではなく、一高・帝大ばかりではなく、高商や慶応の学生も参加していたという。

そして、とくに白雨会の特徴は、最初の会員である星野哲男の、白雨会の名所の由来について説明した次の手紙に示される、という。

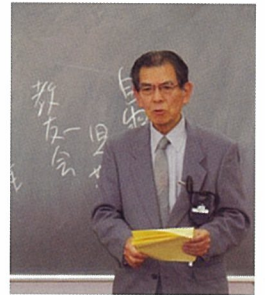
「之（白雨）は大雨ではありません、決して豪雨ではありません。勢力ではありません。腕力ではありません。野を湿し柔らかにする静かな雨、小山に歓喜を与へ田畑に平和を持来たす雨であります。」

すなわち、白雨会は互いの交わりと親睦に中心をおいた友好的な集団であり、その中心を占めていたのが坂田だという。

次いで鈴木先生は、坂田が「私の生涯に於て最も感化を受けた二人の先生」として、内村鑑三と、東京帝大で教えを受けたケーベルを挙げていることを中心に話して下さった。坂田は、内村鑑三については、最初にも触れたように、青年時代に紹介されてその書物を読み始め、その後終生、師と仰いで師事している。もうひとりのケーベルからは、東京帝大で哲学を学んでいる。ケーベルはロシア人であり、ギリシア正教に属していた、しかしその後カトリックに改宗するが、自由な信仰を持ち、葬儀も信仰にとらわれないものだった、という。ケーベルは1923年6月14日に亡くなり、雑司ヶ谷霊園に埋葬される。坂田は以後毎年命日に墓参をしている。

鈴木先生は、坂田が感化を受けたという内村とケーベルが共に、しばしば引用して高く評価しているのがレッシングだといわれる。レッシングは教派的な狭隘な信仰心を排し、宗教的な寛容を尊重した。内村鑑三自身も、レッシングと同様の宗教的な寛容心を持っていた、という。

無教会の内村が、バプテスト教会に属するままで師事することを坂田に許したことをいぶかしく思っていたが、鈴木先生の話を知って氷解する思いであった。



第3回 テーマ『捜真女学校と坂田祐』

講師 小玉敏子先生（捜真学院理事長、元関東学院女子短期大学学長）



小玉先生は、まず捜真女学校の創立の時と場所について説明して下さった。捜真では現在、創立の時を1886（明治19）年としているが、これはブラウン夫人シャーロットが一時帰国し、クララ・A・サンズから寄宿女生徒7名を預かり、教え始めたときである、という。ただ、ブラウン夫人はもうすでに1873年に来日してまもなく、町の少女たちを教えていたという。1875年にブラウン夫人からサンズが学校を引き継ぎ、さらにその一部をブラウン夫人がもう一度引き受けたのだ、という。

設立の場所は、最初は山手75番だったが、その後67番、さらに1891年に34番に校舎が建設されて、そこに移ったという。捜真女学校という名称が使われたのは、その翌年、1892年からである。その後1910年に神奈川・中丸の現在地に移ったのだ、という。

坂田が捜真女学校校長になったのは、1932（昭和7）年からである。1929年からの世界大恐慌の影響もあり、また、志願者が激減したこともあり、さらに、横浜にはキリスト教主義の女学校が他にもあるということなどもあり、ミッションは捜真女学校を閉鎖することを決定した。捜真の理事会も同窓会も非常に驚き、関東学院高等学部長兼中学部長であった坂田に捜真の校長を兼任して、何とか捜真を存続するように要望したのであった。

以前、関東大震災の折に、関東学院は校舎が全壊し、授業をすることができなくなった。そのとき捜真のコンヴァース校長の好意により、捜真の校舎を借りて授業を続けることができた。坂田はそのことを深く感謝し、いつか恩返しをしたいと考えており、そうした思いもあって引き受けたのだ、という。

捜真の校長に就任した坂田は、生徒の定員増を行い、家政科を新設し、校舎の改修と増築を行って再建に努め、ミッションの援助からの自立を目指す。1943年には、財団法人捜真女学校を組織し、設立認可される。しかしその後、1945年5月29日の横浜大空襲で校舎が全焼する。幸い、関東学院の校舎が一部残ったので、今度は、捜真が関東学院の校舎を借りて授業を再開する。

戦後、学校の再建を巡って関東学院との合併問題が起こり、同窓会などとの意見の食い違いもあり、坂田は捜真女学校の理事長、および、校長を辞任する。

「坂田祐日記」とその解読について

坂田祐研究プロジェクト客員研究員 坂田 創

2001年10月13日にキリスト教と文化研究所が発足した。その後所長の森島牧人先生からお話があり、将来坂田祐の研究を始めたいので協力してほしいということであった。そこで私は保管していた坂田祐の日記を、研究資料として提供することを申し出たところ喜んでいただけたので、学校法人に寄贈の手続きを取り03年3月に理事長の承認を得た。そして日記は研究所に研究資料として保管されることになった。

その後03年度に研究所客員を委嘱された。その年の11月8日に公開シンポジウム「坂田祐と関東学院」が開かれ、その席で「家庭における坂田祐」と題して講演を行い、この日記のことも触れた。このシンポジウムを契機として坂田祐の研究が開始されることになった。

04年度になり「坂田祐資料特別研究チーム」が発足し、5月26日の委員会で坂田日記の解読計画が決まった。私が日記の和文の部分、佐々木晃氏が英文の部分を解読することになった。「解読」とは「普通には読めない文章を読み解くこと」と辞書に記されているが、事実この日記は可なり癖のある読みにくい文字で書かれていて、一見読むのを躊躇する程のものである。筆者本人も「日記は自分だけ分かればいいので、人には分からなくてもいいのだ」と言っていた。しかし委員会は身近にいた私なら何とか読めるだろうということで指名したのである。私的なこの日記を寄贈することには迷いもあったが、学校の歴史の資料として役に立つであろうと考えて寄贈したのであるから、死蔵されている意味がない、私には解読の責任があると思ひ引き受けた次第であった。

04年6月から解読を開始した。引き受けはしたものの矢張り最初は大変でなかなか読めず、字の癖が分かるまでは難渋した。むかし高谷道男先生がヘボンの手紙を解読しておられ、その苦労話をお聞きし、「始めは読めなくても、一カ月我慢してコツコツやっていたら、やがて読めるようになる」と言われたことを思い出してチャレンジした。先ず昭和20年終戦の年から始めた、私自身もこの時を経験した一人であり、学院も横浜大空襲で大打撃を受けた年であったので興味があったからである。最初のうちは日記全部を解読しようとは思わず話題となりそうな箇所を拾い読みしていたが、日記は一年全部を通してその流れを読むことが大切であると思ひ、通年解読の方針で現在に至っている。

この日記は作家や政治家の日記と異なり、あまり感想、意見がなく淡々と事実を記しているものでその点面白みに欠けるが、歴史資料としては役に立つものと思われる。私はある年代筆者と同じ環境に生活し見聞きしていたことも多く、また自身も関東学院に長いこと関わっていたので、文脈を理解し易いので解読には可なり力になっている。

解読は現在で約5年半続けてきたが、遅々たる歩みであって今までに完了したのは13年分である。解読原稿は逐次研究所に納めCD化されている。また研究所所報に抜粋して掲載されている。日記は研究所に約50冊保管されているので完結は前途遼遠である。私はこれをライフワークとして許される限りやらせていただきたいと思います。皆様のご指導とご鞭撻をお願いしたいと思う。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話：045-786-7873 (研究所直通 月～金曜 10:00～16:00まで)

FAX：045-786-7806 (研究所直通 24時間受付)

発行者：村椿 真理

Director: Makoto Muratsubaki